慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代宗教改革期において「異教徒」とは誰のことだったか：リチャード・フッカー『教会政治理法論』を中心に
Sub Title	The concept of pagans in the English reformation : a study of Richard Hooker's The laws of ecclesiastical polity
Author	田子山, 和歌子(Tagoyama, Wakako)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.125- 144
JaLC DOI	10.14991/005.00000054-0125
Abstract	This essay aims to examine the significance of "Pagans" in the history of Christian thought and its development, by focusing on the theology of Richard Hooker, a member of Anglican Church during the reign of Elizabeth I in the late 16th century. In the context of the history of Christian thought, "Pagans" generally refers to those who have faith in religions other than Christianity, those who are religious outsiders of Christianity, so to speak. However, in 16th century England, most of people, except Jewish people, were Christian, and there were no Pagans. Nevertheless, Hooker often refers to "heathens" in his main work The Laws of Ecclesiastical Polity. What did he mean by the word "Pagans"? To sum up, for Hooker, "Pagans" are those who have reason, that is, "mere natural men". And insofar as the essence of Paganism is defined in terms of having reason, Hooker believed that Pagans and Christians share a common way of being, which is that both of them possess reason. This understanding of Paganism may shed light on the difficult question that academic researchers in Hooker have been grappling with: how can reason and grace cooperate with one another in Hooker? While Hooker took a position of "rationalism of his own, he concurs with the reformed Revelational-Biblicism by emphasizing "grace" over reason in conversion. His ambivalent and complex attitude has caused interpretive difficulties as to how reason and grace can work together in the theology of Hooker. However, because Pagans is the best example of a person who has experienced conversion, this case study could reveal how reason and grace cooperate with one another in the theology of Hooker. We can expect that an interesting aspect

	of "rationalism in faith" is to emerge from an analysis of Hooker's understanding of Paganism.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代宗教改革期において「異教徒」とは誰のことだったか
―リチャード・フッカー『教会政治理法論』を中心に―

田子山　和歌子

Abstract

This essay aims to examine the significance of “Pagans” in the history of Christian thought and its development, by focusing on the theology of Richard Hooker, a member of Anglican Church during the reign of Elizabeth I in the late 16th century. In the context of the history of Christian thought, “Pagans” generally refers to those who have faith in religions other than Christianity, those who are religious outsiders of Christianity, so to speak. However, in 16th century England, most of people, except Jewish people, were Christian, and there were no Pagans. Nevertheless, Hooker often refers to “heathens” in his main work *The Laws of Ecclesiastical Polity*. What did he mean by the word “Pagans”? To sum up, for Hooker, “Pagans” are those who have reason, that is, “mere natural men”. And insofar as the essence of Paganism is defined in terms of having reason, Hooker believed that Pagans and Christians share a common way of being, which is that both of them possess reason. This understanding of Paganism may shed light on the difficult question that academic researchers in Hooker have been grappling with: how can reason and grace cooperate with one another in Hooker? While Hooker took a position of “rationalism of his own, he concurs with the reformed Revelational-Biblicism by emphasizing “grace” over reason in conversion. His ambivalent and complex attitude has caused interpretive difficulties as to how reason and grace can work together in the theology of Hooker. However, because Pagans is the best example of a person who has experienced conversion, this case study could reveal how reason and grace cooperate with one another in the theology of Hooker. We can expect that an interesting aspect of “rationalism in faith” is to emerge from an analysis of Hooker’s understanding of Paganism.

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号（2023）pp.125-144

本論考は、16世紀末のエリザベス一世の治政下でイングランド国教会の聖職者として活躍し、今日までつづく国教会の基本的路線であるアングリカニズムの創始者のひとりに数えられるリチャード・フッカー Hookerに定位しつつ、キリスト教史における「異教徒」Pagans, Paynim, Heathens, Gentles[1]の意義の変遷と展開について考察することを目指すものである。

16世紀のイングランドでは、ヘンリー 8世の離婚問題に端を発した宗教改革が興り、ローマカトリック教会から独立したかたちでイングランド国教会が成立した。が、教会法の整備はむろんのこと、教会と国家の関係をいかに考えるかといった問題は、「国王至上法」および「礼拝統一法」をはじめとしたいわゆるエリザベス的解決後もなお、多くの課題を残すことになった。問題の中心は、国教会の聖職者の間で、上述のエリザベス的解決を重視・保持しようとする保守的な体制主義者conformistと、エリザベス的解決に安住することなく、カルヴァン主義に即しつつさらなる改革を推進しようとした急進派のピューリタンの分断にあった[2]。フッカーは体制主義者のひとりとして数えられるが、彼は、自身が主任牧師を務めたテンプル教会に同じく奉職していた改革推進派であるピューリタンのトラバースと論戦を重ねる中で、自らの思想を錬磨させていった。1595年以降次々と公刊された『教会政治理法論』[3]はその大きな成果と言える。さて、本稿で注目したいのは、彼の著作

1　Pagans, Paynim, Heathens, Gentilesはいずれも「異教徒」（あるいは「異邦人」）と訳されるが、それぞれ語源は異なる。Pagans, Paynim, Heathensはギリシャ語のἔθνος, Gentilesはγένοςに由来する。いずれも「民族」の意だが、転意して「他民族」「異邦人」「異教徒」を指すようになった。フッカー自身はいずれの語もほとんど同じものとして用いている。

2　本稿において《急進派（ピューリタン）》とは、ヘンリー8世の宗教改革以降も、大陸のカルヴァン主義の影響下、国教会の教会体制の改革を引き続き行うべく、国教会にとどまり続け、議会等から任命を受けた聖職者として奉職していた一派を指す。より広義には、16世紀末にすでにイングランド国教会を離脱していた、バプテスト、会衆派、クエーカー派などのいわゆる「分離派」を含む、幅広い集団を指すが、ここではこの意味では用いない。

3　Richard Hooker, *The Laws of Ecclesiastical Polity*, The Folger Library Edition of The Works of Richard Hooker, W. Speed Hill ed.Vol.1-3. Harvard University Press (1981), *Richard Hooker of The Laws of Ecclesiastical Polity A critical edition with modern*

に散見される「異教徒」(あるいは「異邦人」。Pagans, Heathens, Paynim, Gentilesとも。本稿ではこれらの語の区別はせず「異教徒」で統一して表記する)という語である。この語はフッカーにとって何を意味していたのか。

異教徒とは、特にユダヤ教徒およびキリスト教徒が、自己とは異なる宗教を信仰する〈辺境〉の人々を、自身と区別するために用いた表現である。キリスト教について言うならば、新約聖書の世界においては、ローマ人やギリシャ人は、イエスやパウロらにとっての異教徒だった。また、4世紀のアウグスティヌスにとっては、ヴァンダル人をはじめとするゲルマン人、また、マニ教徒がそうだった。13世紀のトマス・アクィナスにとっては、同時代においてイベリア半島を席巻していたイスラム教徒（とりわけアリストテレス哲学を継承したアヴェロエス）がそうだった。

16世紀においても、異教徒は、オスマン帝国のイスラム勢力のように現実的な〈辺境〉の脅威として、確かに存在していた。しかしこの場合の「異教徒」は、ヨーロッパ大陸から離れた島国イングランドに生きたフッカーにとっては、現実味がはるかに薄かっただろう。実際、3世紀のキリスト教の上陸後から十数世紀経た16世紀の段階のイングランドにおいては、ほぼすべてがキリスト者であった。イングランド宗教改革も、たしかに、ローマカトリック教会との決別、国教会分離派の誕生、さらには、先にも触れたような国教会内部での体制主義派と急進派のピューリタンの対立など、イングランド国教会内外でさまざまな分断が経験されたが、こうした紛糾はイングランドおよびその周辺世界のほぼすべてがキリスト者だったからこそのものだった。そのような16世紀末イングランドにおいて、フッカーが、しばしば『教会政治理法論』中で異教徒について言及しているのはなぜか。彼にとって「異教徒」とは、何を意味していたのか。

結論を先に言えば、フッカーの場合、異教徒とは、「自然本性を有するだけの者mere natural man[4]」のことだった。このことの含意については後程問題

---

spelling, A.S. McGrade ed. Vol.1-3. Oxford University Press (2013)（以下、‘Laws’と略記）

4　「自然本性を有するだけの人間」という表現の独自性をフッカーにおそらく初め

にしていくが、さしあたりの答えを言うなら「自然本性を有するだけの者」とは、理性を有した者に他ならない。そして、このように異教徒の本質を理性にみる限りにおいては、異教徒と、キリスト者とは、ともに理性を有するという共通な在り方を有しているというのが、フッカーの考えだった。このような異教徒理解は、フッカーにおいて理性と恩恵の協働はいかに可能か、という、従来のフッカー研究が取り組んできた難問に光を当ててくれるものと思われる。フッカーは「理性主義」に立つ一方で、回心においては理性を超えた恩恵を重視する「恩恵論」に立つ。こうしたどっちつかずの複雑な態度が、フッカーにおいて理性と恩恵の協働はいかに可能か、という解釈上の困難を生み出してきた。しかし、異教徒を、回心経験者の最たる事例であると考えるなら、その事例に焦点を当てて分析することで、フッカーにおいて理性と恩恵の協働プロセスがどのようなものであるかを見定めることができるのではないか。そして、事実〈信仰における理性主義〉という興味深い側面が、フッカーの異教徒理解の分析から見えてくると思われるのである。

1．トマス・アクィナスにおける異教徒理解

まず、フッカーの異教徒理解を見る前に、伝統的な異教徒理解、とりわけ、フッカーにも甚大な影響を与えたことで知られている、トマス・アクィナスの異教徒理解について手短に触れることにしたい。

トマスは、『神学大全』[5]において、異教徒を、ユダヤ人Jews、異端者hereticsといった、おなじようにキリスト教を受け入れない者たちと比較・区別することで、その位置づけを図った。トマスによれば、異教徒、ユダヤ

て見出し、分析を深めたのは、Nigel Voak, *Richard Hooker and Reformed Theology*, Oxford University Press(2003), *Richard Hooker and The Principle of "Sola Scriptura"*, *The Journal of Theological Studies New Series*, Vol. 59, No. 1, Oxford University Press (2008), pp. 96-139である。理性と恩恵の調和を考察するうえで、Voakは、mere natural manという表現をフッカーの理性主義を支える鍵概念だと考えた。しかしこの表現が「異教徒」を指すという視点がなぜかVoakには欠けている。本稿はVoakの方向性に即しつつ、しかし、これまで光が当てられてこなかったと思われる、異教徒と理性の結びつきに注目し、分析を行った。

5　*Summa Thologiae*, II^{a}-IIae. q. 10 a. 5 co.

人、異端者を分ける基準は、〈信仰〉をどの程度、破壊corruptioしているかということにある。そして、信仰を破壊する程度に応じて、罪が重くなるのだと、トマスは考える。では異教徒はどうかといえば、トマスによれば、異教徒は信仰をまだ受け入れていない者である。それゆえ、異教徒は、信仰を「破壊」してはいないと、トマスは考える。信仰を破壊するには何らかの形で既に信仰を受け入れていないといけないからである。よって、異教徒は、程度に差はあれ、信仰を何らかの仕方で既に受け入れているユダヤ人、異端者と比べれば、はるかに罪が軽い。

しかし、トマスによれば、罪が軽いはずの異教徒も、ユダヤ人、異端者と同じく、結局は「信仰をもたない者、不信仰者infidelis」の範疇に含まれるのだという。異教徒を「信仰を持っていない者」ないしは「不信仰者」と規定することには、いささか違和感を覚えさせられることかもしれない。なぜなら、異教徒は、確かに、キリスト教信仰は有していないが、彼らは彼らで別な宗教的信仰を有している可能性は否定できないからである。にもかかわらずトマスが異教徒を不信仰者とみなすのは、トマスにとって信仰はキリスト教ただ一つしかない[6]からである。キリスト教を唯一無二の信仰とする世界観の中では、異教徒は、ユダヤ人、異端者と共に「不信仰者」となるのである。

2．フッカーの場合―「有徳なる異教徒」観との比較

以上のように、トマスの場合、異教徒は、異端者やユダヤ人とともに、不信仰者という大きな枠組みに含まれる。ただし、異端者やユダヤ人に比べれば、信仰に反したり破壊したりしていないことから、異教徒は罪が軽いとトマスは考えていた。ではフッカーの場合はどうか。実のところ、フッカーの立場は微妙である。というのは、フッカーには、フッカーの論敵だった同時代のピューリタンたちと同様、基本的にはトマスの「不信仰者」の枠組みをそのまま踏襲しつつ、さらに新たな理解を異教徒理解として上乗せさせてい

6　Ibid.

る部分があるからである。

例を挙げよう。フッカーは、新約聖書・使徒言行録において使徒パウロの審問者として登場するフェストゥスという人物について『教会政治理法論』で紹介している。フェストゥスは、ローマ人の官僚であり、キリスト教信仰をもたぬ異教徒だった。この異教徒フェストゥスをフッカーは「不信仰者」infidelと呼んでいる。ところが同時にフッカーは、トマスには見られなかったであろう、もう一つ注目すべき表現でフェストゥスのことを呼ぶ。それは、フッカーが、フェストゥスのことを、「自然本性を有するだけの人間mere natural man」であるとも述べていることである。この表現は何を意味するのか。それを見る前に、フェストゥスにかかわるフッカーの言を、以下の引用で確認しておこう。

> フェストゥスは、自然本性を有するだけの人間mere natural humanで、不信仰者infidelであるローマ人であり、この種の（＊キリスト教の）神に関することがらに不案内であったので、（＊キリスト教の信仰について、使徒）パウロの話を聞いたものの、何を話しているか理解できなかった。（＊キリスト教の教理の核である）キリストが苦しみを受けたのち死から復活したことを、フェストゥスは、聞くに値しない愚かで迷信的な虚構だと否定したのである。こうしたことを霊によって知り、また、聖霊の力によってこれらのことを語っているパウロは、フェストゥスの目からすれば、学識はあるものの狂人に見えた[7]。（＊は本稿筆者による補足）

先に見たように、異教徒であるフェストゥスを、フッカーはトマスと同じく「不信仰者」infidelと呼んでいる。が、他方で、フッカーは、トマスとは異なり、フェストゥスを「自然本性を有するだけの人間mere natural man」であるとも述べている。ではフッカーがこのような表現を使う意味はどこにあるのか。

7　Laws. 3-8-6.

この表現をフッカーは〈理性reason〉を備えた人間を指すために用いている。フッカーにとって理性とは推論を行う能力のことである[8]。推論の能力とは、命題群を三段論法の推論規則にのっとって、そこからさらに新たな真なる命題を導く能力のことである。この能力、すなわち理性を、「自然本性を有するだけの人間」は備えているのだと、フッカーは考えている。では理性の力は、どの程度のことをなしうるか。フッカーによれば、理性の力によって、人間は、神の存在や、神にわたしたちがなすべき務めである、神への愛や、隣人愛も、知ることができるのだという。こうした神への愛や、隣人愛の務めは、キリスト教における教えの中で「第一の、もっとも偉大な教え」である。このような教えさえもが、理性の力を持つ限り「自然本性を有するだけの人間」の異教徒にも知り得ると、フッカーは考えている[9]。

以上のようにフッカーは、異教徒を、不信仰者としてだけでなく、理性を備えた人間という枠組みから見る。そして、理性を備えていることから、異教徒であっても、キリスト教のさまざまな重要な教えについて知り得るのだと、フッカーは考えている。ここで、不信仰者という、キリスト者とそうでないものとを截然と分ける基準でもって異教徒をたんに規定せず、自然本性を備えている者、ないしは、理性を備えている者ということによって、異教徒を規定したことは大きい。なぜなら、異教徒であれ、キリスト者であれ、いずれも理性を備えている以上、理性を備えている者という限りでは、異教徒とキリスト者の間には、差異も区別もなくなるからである。

さて、理性を持っているという点において異教徒をキリスト者に近しいものと見る、こうした異教徒観は、同時代のピューリタンたちも共有していたと思われる「有徳な異教徒」と言われる見方であって、フッカー固有の異教徒観ではないのではあるまいか。このような疑問が出てくるかもしれない。「有徳な異教徒」観は、伝統的な異教徒理解の一つであり、パウロの時代からすでにあった。ソクラテス、プラトン、アリストテレス、キケロといった古代ギリシャ、ラテン期の哲学者たちは、有徳なる異教徒の代表ともいえ

8　Laws. 1-8-6.

9　Ibid.

る。キリスト信仰を有していないという点を除けば、たかい水準を誇る彼らの〈理性〉は、彼らを不信仰者として低くみなすキリスト者にとっても、敬意の対象にさえなったのである。このような見方は、宗教改革後、改革派の人々にも積極的に取り入れられたものだった。

実際、カルヴァンも『綱要』第2篇2章15節において、「聖書が「プシキコイ」（希：ψυχικὸι 自然的人間の意）と呼ぶ人も、低次の事項については鋭敏でありまた聡明なのであるから、これらの範例に倣って、真の善が奪い去られた後にも、主が人間にどれほどの自然のたまものを残したのかを学ぶべきである」と述べている[10]。このことからも、異教徒を低次なるものとする評価と同時に、その高次の理性を「範例」として賞賛する評価が、みてとれる。

では、フッカーはどうであるか。実のところフッカーにも「有徳なる異教徒」観とも思えるような異教徒への言及がないわけではない。

> 人間は、真理を認識し、徳を実践していくことで、この世界の被造物の中で、このうえなく神にふさわしくありたいと希う。こうした完成された在り方は、神がそうあれと教えてくれた（＊クリスチャンとしての）私たちだけでなく、人間の中でも神に最も近しい者とは判断されなかった者（＊異教徒）たちもまた知っているものである。じっさい、どれほど頻繁にプラトンは、賢人がどれほど知によって喜ぶか、また、どれほど知が彼らを天へと向かわせるか、また、知が彼らを、神ほどではないにしても、あたかも神のごとく、高次の、敬愛されるべき、神的な存在にすることか、示すことで、人々を愛知に喚起したことだろうか。また、メルキュリウス・トリスメギストゥスも、正しい魂の徳について、「このような精神は、言葉や行いによって各々のものに善行を行うすべての人について、惜しみなく賛辞と賞賛を送っている。なぜなら、彼ら

10　ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要』改訳版第1篇・第2篇、新教出版社（2020）、p.298. なお「プシキコイ」は「プシュキコイ」とも表記される。本稿では渡辺訳に従って「プシキコイ」とする。

は、精神の父の型（pattern）に倣って自らを律することを学んでいるからである。」と語っている。[11]（＊は本稿筆者による補足）

以上のように、フッカーも、プラトンやトリスメギストゥスといった異教徒を、その高次の理性を以て、キリスト者に近しい者だと見、高い評価を与えている。しかしながら、異教徒を、「自然本性を有するだけの人間」として、その理性を以て解するフッカーの異教徒観は、上で見たようなカルヴァンの示した「有徳なる異教徒」観と同じものだろうか。異教徒の理性を高く評価している限りにおいては、フッカーとカルヴァンとは確かによく似ている。しかしもしそうであれば、フッカーは、カルヴァン、そして、カルヴァンに追従したカートライトやトラバースといったイングランド国教会内の急進派、すなわち、ピューリタンとも、フッカーはそれほど変わりないことになってしまうだろう。

以上の疑問を見ていくために、まず、ここでピューリタンの基本的な立場を確認しておこう。彼らの立場は、啓示・聖書絶対主義にある。ここから、彼らは理性を啓示や聖書に反するものとして軽視し、理性と信仰の絶対的な差を強調した。以上のような啓示・聖書絶対主義、そして、理性軽視の傾向は、イングランド宗教改革初期からすでにあったが、特にメアリの治世以降、断続的に起こった宗教弾圧を契機にますます加速した。弾圧下、ピューリタンたちは、ヨーロッパ大陸、特にジュネーブ、チューリッヒ、そして、オランダへと逃れ、カルヴァン派神学およびその教会政治体制に学んだ[12]。そのような中で、ピューリタンたちは、カルヴァン派が特に重視するアウグスティヌス主義的な〈人間理性の堕落〉にもとづき、神の啓示と神の啓示の書である聖書を絶対視する〈啓示・聖書絶対主義〉を自己の立場として強固なものにしていくようになる。それによれば、人間救済にかかわる教えである、啓示・聖書の教えは、堕落した人間理性では決して推し量ることができ

11　Laws. 1-5-3.

12　八代崇「エリザベス朝ピューリタン運動の源流」『桃山学院大学キリスト教論集』所収、桃山学院大学キリスト教学会編（1973年）pp.23-54。

ない。よって、理性しか持たない状態から回心へと向かうには、神からの恩恵という、理性では到底コントロールできない、外付けの力が不可欠である。そして回心に必要なのは外付けの恩恵の力〈神の霊〉であって理性ではない[13]。さらに回心後も、理性は不要である。このように、カルヴァン主義を色濃く受けついだカートライトらにとっては「理性は宗教の敵enemy[14]」だった。

さて、このような「理性は宗教の敵」を是とする文脈のもとで、先のカルヴァンの異教徒についての言葉を見ると、別な景色が浮かび上がってこよう。すなわち、カルヴァンの「有徳なる異教徒」観は、肯定的な評価に見える、が、実のところ、彼の評価は、回心前の異教徒が有していた理性と、回心時および回心後の信仰者が持つ信仰の間の溝をかえって浮き彫りにしたものと読むことができるのである。

以上のように、回心前の理性と回心後の信仰の埋めがたい溝をかえって浮き彫りにするカルヴァンの「有徳なる異教徒」観は、「理性は宗教の敵」を是とするピューリタンたちも共有するところであったと考えられる。では、フッカーはどうだろうか。この点を改めて考えてみたい。フッカーの異教徒理解は、これらとは明らかに異なると思われる。なぜなら、カルヴァンに追従した啓示・聖書絶対主義に立ち、「理性は宗教の敵」を是とするピューリタンたちにフッカーは明確に異を唱えているからである。フッカーからすれば、「理性は宗教の敵」と考えるピューリタンたちは、「あたかも信仰において成熟していることは、思慮や判断において未熟であるということだと言わんばかり」であり、また、「子供じみた単純性こそが霊的かつ神的な叡智の母であるといわんばかりの見解[15]」の持ち主に映ったのである。

こうしたフッカーの批判は、当時のイングランドの神学的状況、および、教会・世俗をふくめた現状への危惧と呼応するものだった。神学的状況について見てみるならば、ピューリタンたちは、ルターやカルヴァンのスタイル

13　Laws. 3-8-4.

14　Ibid.

15　Laws. 3-8-6.

に従って、啓示の書である聖書を「字句通り」読むことを実践しようとしていた。この際、聖書読解も、聖書学に精通した専門家の手を借りず、また、自らの理性を用いて批判的に読むこともなく、神が個々人に恩恵として与えた霊のはたらきによって聖書を読むことをよしとする、素朴な個人主義的傾向が強かった。こうした傾向は、聖書中のペテロらアンデレといった無学な使徒たちが霊の力にのみよって人々を回心にみちびく姿を、彼らがまさに字句通り捉え、自らのモデルとしていることにも見てとれる[16]とフッカーは考えたのである。

問題は、以上のような聖書解釈の方法論にとどまらなかった。ピューリタンの「聖書のみ」「啓示のみ」を中心とする啓示・聖書絶対主義は、長老制を理想とした教会政治制度の改編とともに、最終的には、教会権力の上位に国家権力の君主を据えるというイングランド政体独特の均衡さえも大胆に組み替える変革を目指した[17]。これらを推進するピューリタンのうちに流れていた、啓示・聖書絶対主義と、理性軽視の立場は、エリザベス的宗教解決以来、これ以上の改革を是としないフッカーのような体制主義者には極めて危険なものに映ったのである。

フッカーの異教徒観は、ピューリタンとは対照的に、異教徒が有している理性を「宗教の敵」とするようなものではない。では彼の異教徒理解とは、具体的にどのようなものなのか。この問題を考える上で大きな障壁となることがある。それは、異教徒がどれ程優れた理性を持っていようとも、神の恩恵によって回心しない限りは、理性のみでは決して会得できない神秘的真理がある、ということを、フッカーも同意している、ということである。その神秘的真理の一つが、先のフェストゥスのエピソードにもあった「キリストの復活」である。この神秘的真理は、いわば外付けの力である神の恩恵によって回心しないと、理性のみでは会得できないものである。そうだとすると、異教徒が恩恵を得て回心できたら、その後は、これまで異教徒が持っていた理性の力は不要になるのではあるまいか。おそらくピューリタンであれ

16　Ibid.

17　Laws. 3-8-1.

ばそう考えるだろう。ではフッカーはどうか。フッカーがどれほど異教徒を〈理性ある者〉として理解したとしても、回心には恩恵の力が不可欠だと考えるなら、結局は、フッカーは、ピューリタンと同様、理性不要論に陥るのではないだろうか。この問題は、フッカーにおいて理性と恩恵の協働はいかに可能か、という、従来フッカー研究が取り組んできた難問に連なる[18]。もしフッカーが理性主義に立ちつつも、一方で、回心における恩恵もまた重視するなら、ピューリタンの理性軽視傾向に異を唱えるフッカーの立ち位置そのものも、また、疑問視されることになるのである。

3．フッカーの理性主義と異教徒理解

フッカーの異教徒理解は、カルヴァンやピューリタンとはどこが異なるのか。前章では、『教会政治理法論』における異教徒フェストゥスのエピソードを紹介したが、この引用箇所に続く形で、フッカーは、以上の問題を考えるうえで重要な手引きになるであろうことを語っている。

> この（＊フェストゥスの）事例が明らかにしているのは、当の使徒（＊パウロ）が別の箇所において教えているように、自然は恩恵を必要とする（nature has need of grace）ということである。恩恵が自然を利用する（grace has use of nature）ということを考えるなら、私たちがこのことに異を唱えることはないだろうと、私は思う[19]。（＊は本稿筆者による補足）

まず以上の引用箇所の前半から見てみよう。フッカーによれば、確かに、

18　フッカーにおける理性と恩恵の調和の問題を提示、疑問視したのはGunner Hillerdal, *Reason and Revelation in Richard Hooker*, CWK CLEERUP/LUND (1962), Peter Munz, *The place of Hooker in the history of thought*, Routledge (1952)である。また、フッカーの恩寵論に立ちつつ理性と恩恵のすみわけ案を提示したのはNigel Atkinson, *Richard Hooker and the Authority of Scripture, Tradition and Reason*, Regent College Publishing (2005), Torrance Kirby, *The Doctrine of the Royal Supremacy in the Thought of Richard Hooker*, Oxford (1987)である。これに対しフッカーにおける理性主義を強く認めたのは、前掲のVoakである。

19　Laws. 3-8-6.

フェストゥスのような異教徒は、その理性によってはキリストの復活というキリスト教の神秘的真理は理解できない。恩恵が不足しているからである。しかしこのように理性に恩恵が不足していることを、フッカーは否定的にはとらえていない。むしろ、理性には恩恵が不足しているからこそ、「自然は恩恵を必要とする」のだと、フッカーは主張しているのである。

さて「自然は恩恵を必要とする」という個所については、言及すべきことがある。それはこの個所の聖書引用についてである。フッカーはこの「自然は恩恵を必要とする」の箇所を「当の使徒（パウロ）がべつな箇所で教えている」とだけ述べ、直接的に聖書個所を明示してはいない。が、マックグレードによれば、「自然は恩恵を必要とする」というこの個所の引用元は、第一コリント2章14節なのだという[20]。ところが、奇妙なことに、第一コリント2章14節を見ると、原典のギリシャ語においても、また、ラテン語のウルガタ版においても、さらに、フッカー時代よりやや後世になるがKing James Versionにおいても、フッカーのように「自然は恩恵を必要とする」とはなっていない。そうではなく「自然的人間は神の霊を受け入れていない」と記されているのである。この個所を詳しく見てみると「自然的人間」（希：ψυχικὸς ἄνθρωπος/羅：Animalis homo/英：the natural man）とは「自然」と同じものを指す。いずれも理性を持ったものを指すからである。また、「神の霊」（希：τὰ τοῦ πνεύματος τοῦ θεοῦ/羅：Spiritus Dei/英：the Spirit of God）も、恩恵を指すことは容易に理解できる。しかし、そう言い換えたとしても、この聖書個所を、フッカーのように「自然は恩恵を必要とする」と読み替えることは一見するかぎり難しい。なぜなら、聖書個所をすなおに読むなら、自然は恩恵を「受け入れ（ 希：δέχεται/羅：percipit/英：receiveth）ていない」としか読めないからである。自然は恩恵を「受け入れていない」と、自然は恩恵を「必要とする」とでは、少なからぬ差があろう。

---

20 *Richard Hooker of The Laws of Ecclesiastical Polity*, A.S. McGrade ed., Oxford University Press (2013), Vol. 1, p.158, Note r. なお第一コリントのギリシャ語箇所は、すべてネストレ＝アーラント版（Nestle-Aland 28 *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 2006）を参照した。

では、この聖書個所についてのマックグレードの指摘は間違いなのか、というと、おそらくそうではないだろう。フッカー著作集の決定版ともいえるFolger版の注釈によれば、この個所のフッカーの文言は、恩恵と自然は相反する関係にはないのだという、トマス的な恩恵―自然補完論に淵源を持っているのだという[21]。Folger版注釈のとおり、フッカーがトマス主義に立っていると考えるなら、第一コリントの箇所「自然は恩恵を受け入れていない」をフッカーが「自然は恩恵を必要とする」と読み替えた理由は、次のように解されよう。すなわち、自然とは、人間理性のことである。そして、人間理性は、単独では回心して信仰を得るには到底足りず、不完全である。だから、このように回心に至らないという限りでは、人間理性はまだ「恩恵を受けていない」。しかし、そうであればこそ、人間理性はなおさら自らの不完全性を補って回心という完成へみちびく「恩恵を必要とする」のだ、と。このようにトマス的な恩恵―自然補完論に即してみるならば、第一コリントの当該箇所は、なるほど、フッカーのように「自然は恩恵を必要とする」と読むことが可能だろう。

一方、この第一コリント2章14節の個所を、もちろん、すなおに読み、「自然は恩恵を受け入れていない」という方向で理解した者がいないわけではない。その代表例が、先に挙げた「有徳なる異教徒」観を『キリスト教綱要』第2篇2章15節で展開したカルヴァンである。カルヴァンの言をここで改めて確認したい。「聖書が「プシキコイ」（ψυχικὸι 自然的人間）と呼ぶ人も、低次の事項については鋭敏でありまた聡明なのであるから、これらの範例に倣って、真の善が奪い去られた後にも、主が人間にどれほどの自然のたまものを残したのかを学ぶべきである」。さて、ここで、異教徒をカルヴァンが「自然的人間」と表現していること、さらに、自然的人間に相当するギリシャ語としてカルヴァンが「プシキコイ」ψυχικὸιという語を充てているのに注目したい。『キリスト教綱要』訳者である渡辺信夫氏の注釈にしたがえ

21 *The Folger Library Edition of The Works of Richard Hooker* Vol.6. ed.by Speed Hill, Harvard University Press (1982), Vol. 6, p.576。なおFolger版注釈で言及されているトマスのテキストは *Summa Theologiae*, Ia2ae.109.1.

ば、このカルヴァンの箇所の聖書引用元は、まさに、第一コリント2章14節となっている[22]。厳密に見れば、第一コリント2章14節では「プシキコス（ψυχικὸς 自然的人間）」となっているところをカルヴァンは「プシキコイ（自然的人間たち）」と複数形に変えてはいるのだが、ともあれ、このようなプシキコイをカルヴァンは「異教徒」と同じものとみなしている。そしてそのうえで、そのようなプシキコイは「低次の事項については鋭敏でありまた聡明なのである」と述べていたのである。先に述べたように、このカルヴァンの評価が賞賛ではないことはもちろんである。どれほど「鋭敏」で「聡明」なるプシキコイも自力では回心に至ることはできない。だからこそせいぜい「低次の事項について」評価されるにとどまると、カルヴァンは考えているのである。実際、第一コリント書においても、プシキコイないしプシキコスは、回心を経て信仰を得た「プネマウティコイ」πνευματικοῖ（霊的人間）[23]と対比される形で第一コリント書に登場する。さらにウルガタ版だと「動物的animalis人間」とでも訳されることが可能な語であることからして、明らかに人間としての程度の低さを示す語である。したがって、プシキコイ、すなわち、異教徒は、どれほどすぐれていたとしても、回心に至っていない以上、第一コリントが語るように「恩恵を受け入れていない」。理性と信仰の間に絶対的な差を見るカルヴァンは、第一コリントの当該箇所を、フッカーよりもすなおに読んでいると言えよう。

以上のように、第一コリントの箇所を、「自然は恩恵を必要とする」と読むフッカーと、「自然は恩恵を受けいれていない」と解するカルヴァンとでは、微妙な差がある。とはいえ、そのような読み方の「差」があったとしても、問題は残る。異教徒の理性は単独では回心には不完全であるという基本的理解の点では、フッカーとカルヴァンとでは変わることがない、というのは、依然として真だからである。理性が回心のために恩恵による補完を求め、「恩恵を必要とする」としても、理性だけでは神意である恩恵をどうに

22　ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要』改訳版第1篇・第2篇、新教出版社（2020）、p.298.

23　I. Corinthians 3-1.

もコントロールすることはできないということを、フッカーでも認めているのである。恩恵の力はフッカーにとっても外付けの力なのである。

この問題を考えるために、ここで、非常に重要なフッカーの主張に目を向けてみたい。それは、上掲引用後半でフッカーが「自然は恩恵を必要とする」と対になる形で「恩恵が自然を利用する」と語っている部分である。今までは「自然」の在り方に注目して語っていたフッカーだったが、今度は「恩恵」のほうに視点を移していることに注意したい。つまり、恩恵のほうがどのように自然とかかわるか、ということについて、フッカーは語っている。「恩恵が自然を利用する」という言からわかるのは、フッカーにとって、恩恵の力は、単独で働きかけて、神秘的真理を不信仰者に受け入れるようにするのではないということである。フッカーによれば、恩恵の力は、単独で働くのではなく、理性のもつ力を「利用するhas use of」のだという。「利用する」という言葉を、自然すなわち理性と恩恵の関係をしめすためにフッカーが用いていることは、とても興味深い。そもそも、利用においては、利用する側と、利用される側という、二者の関係が必要である。ただしこの二者の関係は均等ではない。利用する側のほうが、利用される側よりも、優位だからである。しかし、どれほど優位な者である利用者も、目的を達成するために、単独で働くことはない。むしろ、より劣った、利用される側の者と協働することで、目的を達成するのである。そしてフッカーは、理性と恩恵の場合も同じだと考えている。恩恵の力は、単独で働いて、不信仰なる異教徒を回心させて信仰ある人間に変えるという目的を達成するのではない。むしろ、不信仰なる異教徒における理性の力を利用し、協働することで、この目的を達成するのである。恩恵が理性を利用する具体例としてフッカーが挙げているのは、宣教である。宣教とは、信仰者による異教徒の回心への導きのことであるが、まさに、この際も、信仰者を介して働く恩恵の力が、異教徒の理性の力を利用した結果、異教徒は回心に導かれるのである[24]。

「恩恵は理性を利用する」という事態を、今までは恩恵の側から見てきた

24　Laws. 3-8-14.

が、より深く理解するために、今度は、回心する異教徒の側、すなわち、理性の側から見てみよう。異教徒の理性は、ある程度までは聖書の教えを把握できるが、神秘的真理までは把握することができない。よって、異教徒の理性は、単独ではむろん、信仰に至ることはできない。だからこそ理性は恩恵を必要とするのである。では、フッカーにとって、このことは、恩恵と理性の完全なる分断ないしすみわけを意味するのだろうか。すなわち、聖書の教えのうちある程度のレベルまでは理性の力が担当するが、より高次の、キリストの復活のような神秘的真理のレベルになると、理性の打つ手がなくなるために、理性はそこで役目が終わり、あとは回心まで、あるいは、回心後も、恩恵の力が担当する、といったような形での、恩恵と理性のすみわけがあるのだろうか。おそらくカルヴァン、および、カルヴァンの考えを受け継ぐ啓示・聖書絶対主義のピューリタンたちであればそう考えるだろう。しかしながら、フッカーはそうは考えない。なぜならフッカーにとっては、恩恵の力は、単独で働くのではなく、理性の力を「利用する」ことで、理性を完成させるからである。そしてその恩恵による理性の完成形態が、回心なのである。よって、理性の力は、回心前の異教徒の段階でも、また、その異教徒が回心を経て信仰をもった段階でも、分断されることなく、連続して働いていることになる。つまり、異教徒は回心して信仰者になったとしても、異教徒だったころと同じ理性を持ち続けているのである。

以上のように、回心に当たっての恩恵の一方的な力をみとめつつも、回心後も理性の力が保持されるのだとするフッカーの異教徒理解は、カルヴァンとも、また、カルヴァンを継承して啓示・聖書絶対主義に立つピューリタンたちとも明らかに異なる、特異なものとなっている。啓示・聖書絶対主義に立つ限り、どれほどすぐれた異教徒でも、その回心前に持っていた理性は、回心には役に立たず、恩恵のみが、回心および回心後の信仰も支えるからである。

さて、フッカーの場合、理性の力は回心後も続くというだけではない。それどころか、理性の力は、異教徒が信仰者に回心して神を信じる時、神秘的真理の理解を助けて、神へのさらなる信仰を支えるのだと、フッカーは考え

ている。このことをフッカーは次のように述べる。

> 私たちの回心ないしは堅信にとって、自然本性的な理性の力は偉大なものである。が、こうした理性による効力は、（神の）恩恵がなかったら無である。ではどうなるか。以下のようであれば、私たちの目的としては十分だろう。すなわち、神に服従して従順に神を信じる者も、かりに自然本性的な理性の光がなかったら、無知な人や幼児と同じようにしか神を信じない。自然本性的な光は、その人の内面に照射して、神にかかわることがら、すなわち、恩恵により啓示されて、神への名誉ある服従と信仰は正しいことを、理性的精神に説得するに有効なことがら、を、把握するようにとその人を向かわせる[25]。

先に確認したように、フッカーにおいても、神への信仰に不可欠な神秘的真理は、理性が単独では把握することができず、それゆえに、恩恵によって啓示される必要があると考えられている。しかしそれでもなお、フッカーが優れて理性主義的と言えるのは、信仰者が神秘的真理をはじめとする「神のことがらの把握へと向かう」ことができるのだと、考えている点である[26]。そして、それを可能にするのが「理性の光」である。ここが、理性を欠く「無知な人や幼児」のような盲目的な信仰者を是とするピューリタンと、フッカーが大きく異なる点である。ピューリタンにとっては、キリストの復活のような神秘的真理は、回心後もなお、理性の推論の能力によって解明されうるものではないので、信仰者には神秘的真理を合理的に理解することはできないし、他者に合理的に教え説くこともできない。だからこそ、ピューリタンにおける信仰は、理性を欠いた、子供じみた妄信となる。しかし、フッカーはこれとは違う立場を取る。フッカーの場合、理性を持つ者がいったん回心したら、今度は、理性のほうが信仰者の内面に照射して働きかけて、神秘的真理の把握へと信仰者を向かわせるのである。神秘的真理は、理

25　Laws. 3-8-11.

26　Laws. 3-8-14.

性の光をとおして、信仰者へと知られることが可能なのである。むろん、信仰者であっても、神秘的真理を理性的な推論によって、いま・ここで、現実的に理解しているかというと、おそらくそうではない。しかし、少なくとも、理性による神秘的真理の把握の可能性が絶たれることはないのである。

結語

これまでのフッカー研究では、フッカーが恩恵も重視してきたという事実が枷となって、その理性主義の立ち位置、すなわち、どのように理性と恩恵は協働しているか、ということは、難問の一つとみなされてきた。この難問に取り組むための一つの試みとして、本研究では、異教徒という、これまでさほど焦点が当てられてこなかった語に注目し、検討してきた。というのは、異教徒というのは、回心経験者の最たる事例であることから、その事例を見ることで、フッカーにおいて理性と恩恵の協働プロセスがどのようなものであるかを見ることができると考えたからである。フッカーは、異教徒を「自然本性を有するだけの人間」と捉え、異教徒の本質は理性の所有にあるとした。フッカーの異教徒理解の特徴は、回心に際して、恩恵もまた理性を利用する点、異教徒の理性が回心前も後も変わることがない点、さらには、回心後もなお理性が信仰の深化に貢献する点にある。フッカーは、この限りで、恩恵のみを重要視して理性を軽視し、回心における無知や非合理性を美徳とした、啓示・聖書絶対主義のピューリタンたちとは対照的である。フッカーは、理性と恩恵は補完的調和にあるのだとする〈信仰における理性主義〉とでも言うべき新しい地平を打ち出したといえよう。

最後に「異教徒」という語の含意のひろがりについて補足したい。既に述べたように16世紀末イングランドには純粋な意味での異教徒はいなかった。このような状況の下では、「異教徒」は理性のメタファーでしかなかった。すなわち〈辺境〉にある者だった異教徒が、回心によって信仰者に生まれ変わり、キリスト教信仰世界の〈内部〉に入るように、理性もまた、信仰の〈辺境〉にありながらも、回心によって、信仰者であるキリスト者の〈内部〉に入る、といった仕方で、異教徒は理性のメタファーとなっていたのであ

る。このメタファーは、ただし、従来的には、カルヴァンの「有徳なる異教徒」観のように、異教徒の〈辺境〉性は、異教徒がキリスト者の〈内部〉に入ったら、喪失されるのだと解釈されることが多いものだった。しかし、このメタファーは、フッカーの下では、理性と恩恵の補完的調和である〈信仰における理性主義〉を見出す鍵概念となることで、今までにない新しい意味を持つに至った。すなわち、フッカーにおいては、理性が、信仰の〈辺境〉にありながらも、信仰に対立することなく、また、回心後も喪失されることがなく、むしろ、信仰に〈内在化〉される。異教徒というメタファーは、こうしたキリスト者の〈辺境〉にありながらも、キリスト者と対立することなく、また、回心後も自らの在り方が喪失されることもない、キリスト者に〈内在化〉される理性の在り方を映し出しているのである。

文献

第一次文献

Hooker, Richard. *The Laws of Ecclesiastical Polity*, The Folger Library Edition of The Works of Richard Hooker, W. Speed Hill ed.Vol.1-3. Harvard University Press (1981).

Hooker, Richard. *Richard Hooker of The Laws of Ecclesiastical Polity A critical edition with modern spelling*, A.S. McGrade ed. Vol.1-3. Oxford University Press (2013).

第二次文献（フッカー関係）

Atkinson, Nigel (2005) *Richard Hooker and the Authority of Scripture, Tradition and Reason*, Regent College Publishing (2005).

Hillerdal, Gunner (1962) *Reason and Revelation in Richard Hooker*, CWK CLEERUP/LUND.

Munz, Peter(1952) *The place of Hooker in the history of thought*, Routledge.

Kirby, Torrence (1987) *The Doctrine of the Royal Supremacy in the Thought of Richard Hooker*, Oxford.

Voak, Nigel (2003) *Richard Hooker and Reformed Theology*, Oxford University Press (2003).

Voak, Nigel (2008) Richard Hooker and The Principle of “Sola Scriptura”, *The Journal of Theological Studies New Series*, Vol. 59, No. 1, Oxford University Press, pp. 96-139.